

巻 頭 言

「大学紀要の意義と活用」

看護学部 教授 泊 祐子

平成3年まで全国でわずか11校であった看護系大学は、平成4年度以降増加し始め、平成24年4月には大学が203校、16,876人、修士課程が140課程、2398人、博士課程69課程、540人となっている。看護系大学が急激に増えたことによる教員の不足傾向や、博士課程に在学しながら教育に携わる教員が他分野と比較して多い等の現状がある。また、研究者や教育者の養成の充実も喫緊の課題（大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会,2011）と指摘されている。その現状を示す例として、昨今、看護系学会の学術集会では、「若手研究者を育成する」「査読者を育てるためには」等のテーマでワークショップや交流集会が催されている。やはり、投稿論文の質の問題や論文査読での問題が生じているのだらうと想像される。

では、看護系大学はこれらの課題にどのように取り組んでいるのであろうか。紀要を発行している大学が多いので、研究能力の育成の面から「紀要」を取りあげて考えてみたい。

紀要（英: bulletin, memoirs）の定義は、大学（短期大学を含む）などの教育機関や各種の研究所・博物館などが定期的に発行する学術雑誌のことである。紀要は1つの機関で発行されるので、一般的に論文の審査が簡素な査読水準に留まる場合が多く、掲載される論文の学術水準はまちまちとなりがちである。

しかし一方では、紀要なりの意義があるのではないかと思う。これまでに言われていることは、学会論文発表が難しい分野において、特に若手の研究者の研究発表の場を確保することにある。大学院生や若手研究者にとって、紀要の果たす役割は大きいと思われる。

このほか、2つの意義があるのではないかと思う。まず、論文公表の迅速性である。看護系の学術雑誌の場合、掲載までに1、2年を要することが多く、“研究結果の旬”を逃しがちになる可能性があるが、紀要の場合、査読期間が短く、タイトではあるが編集スケジュールに合わせて修正することで、研究を迅速に公表できる。そして、副産物として、定期的に論文を書く機会になり、“書くこと”によって研究を記述する能力が磨かれる。

2つめに、学内教員同士の研究テーマや手法の共通理解の場となりうることである。看護系学会も総合学会は2つあるが、その他は専門分化し、同じ研究分野のことしか、把握しづらい状況にある。自分の専門分野以外は見えなくなりがちであるが、紀要という身近な雑誌から他専門分野の研究動向や、同じ所属内の教員の研究テーマや手法を知ることができ、交流のきっかけとなる場合もある。

本学も大学院設置に向けて準備を進めている最中であり、若手教員の“研究の腕を磨く”場や学内のFDに活用されることを期待している。それらを通して気軽に研究についてのディスカッションができる雰囲気になってほしいと願う。

